

昭和20年、千葉県立大原高女卒業後、昭和22年、美容師、テレビメイク、ヘア、着付、美容室3店舗経営、昭和65年にリタイア。

おいらく行進曲

「墓石に近き恋は、おそるるにたるものなし！！」大歌人川田順が、昭和23年頃、教授夫人とおいらくの恋におちた時、いわしめた言葉である。時に66才。私80才、恋は向うの方へけ飛ばして、も早おそるるにたるものなしの年齢は、はるかに越えている。

息子は「恥が上着をきて歩いている」と言う。栄光も名誉も金もふり捨てた、産業廃き物の身では、何ものもおそるるに足るものなしなのであります。風はさえぎる物なき身の廻りを壮大に吹きまくり、空には果てしなく綿雲の流れるを追い、夜の星空をみては、その果たてにやがて訪れるであろう、あの時に思いをはせる。年老りは背中に背負った行燈だと言われる。薄ぼんやりした灯りで、過ぎ去った時をふり返れたら、物を言うと。何時も風通しのよい窓を開き、アンテナを高くしていたいものだ。古タイヤのゴムのように、弾力のなくなった感性にはなりたくない。最近友達が2人ばかり、浴室で亡くなった。居残っている友人達は、「風呂にお湯をいっぱい張らないで、おへそ位迄にして、しゃがんで入った方が良い。溺死しないですむから・・・」口々に言う。「いいじゃないの。自分で湯かんして、あっと言うまに死んでしまえば」

私は言う。スパゲティ、シンドロームの延命措置で、永生きなどしたくはないのだ。潔いよい死を選択したい。台所の床を拭いてた時、大きなゴキブリが、よろよろと出てきた。羽は破れ、私のことなぞ気にせず、目の前でホイホイの箱の中へ入って行った。まるで自分の死を選択するかのよう、堂々と入って行った。ホ

イホイはゴミ箱へ捨てず、庭の隅へ静かに埋めてやった。老いたゴキブリに感動したのだ。たまに東京へ出ると、娘が食事に誘ってくれる。「何を食いたい？」娘は聞く。「ステーキ。」房総の漁師町で鰯臭いものばかり食べていると、ハイオクのガソリンが入れなくなるのだ。都合の悪い時には、産業廃き物の後期高齢者になり、自分勝手にクライスラー並みのエンジンだと凄む。ハイオクはその為にも必要な、燃料になる。

パンプキンポタージュ。シーサイドサラダ。ステーキ。マンゴープリン。チャイ。娘はオムライスにサラダ。「年老りと食事だから、2人で5千円もあればと思っていると、うちの年老りに限って大間違いだ。1万円でやっとお釣りだ。ブツブツブツ」娘はボヤク。戦争中、私達はお国の為。天皇陛下の為。敗戦後は会社の為、仕事の為。そして結婚しては、亭主の為。子供の為。運が悪ければ姑の為迄頑張ってきた。もう、何々の為は返上して、自分の為に力一杯生きるのだ。余計なことにエネルギーを使うのは止める。不愉快な友人、無神経な隣人、小うるさい親戚、どうぞ、そういう方は其方で好きなようにやって下さい。私のように清く正しく、ウツクシイ人ばかりでは、テレビドラマは面白くない。「おしん」のドラマも出来ない。色々な人間模様であって良いのだ。今更、60年70年を信念もって生きてきた人。皆中に苔の生えてきた人に、ギア、チェンジを求めても無理なのだ。地平線の見えてきた夕映えの道に入っているのです。納得した人生。黙っていても存在感のある人間。

それが私の80年の、トーテムポールなのです。

うなそこ
湖底に沈みしごとき月の夜は
微かにきこゆあの足音が

はやぶさの如く翔とびたし梅雨明けの
籃らんじょう青の空吾を招きぬ

大学卒業後、名古屋市にて会社勤務、1998年退職。

広げよう「小さな勇気」の輪

それは、春先の昼間の地下鉄の車内で始まったことだった。込み合うほどではなかったが、座席はほぼ満席で、私を含め数人が立っていた。途中の駅で荷物を手に乗ってきた私と同年輩の女性は、少し足が不自由なようで杖をついていた。座らせてあげたいと思ったが空席がない。だがよく見ると高校生らしい2人組みが座っていて、1人は荷物を足下に置いているが、もう1人は横に置いて座席を余分に占領している形だ。腕組みをして目をつぶっており、荷物をどけて座らせてやろうという雰囲気はない。

女性を見かねて、私は思わず「その荷物、下に置いてこの人を座らせてやってよ」と声を掛けてしまった。言いながら、常々家で妻から「街頭や駅や乗り物の中で、非常識な若者を見ても正義感から注意などしてはだめよ。殴られたり、時には刺されたりもする怖いご時世なんだから」と言われて、いわゆるジベタリアンなどに不快感を持ちつつも黙って通り過ごしているだけに、この口癖を思い出し、一瞬背筋に冷たいものを感じていた。が、高校生はしぶしぶという感じながら黙って荷物を足元に下ろし女性を座らせてくれた。妻の顔を思い浮かべ、ホッとした。

女性は高校生にも、私にも深く頭を下げて、自分の大きめの荷物を膝の上に置いてうれしそうに着席した。民謡の会に出かけるのです、という。杖をつきながらも元気に生きているお年寄りの1人なのだ。そして偶然、私の降りた都心の駅で彼らも女性も下車した。

すると、出口が同じだとわかった2人の高校生が、なんと、杖を持つ女性の荷物を持って歩き始めたのである。女性は遠慮した

が「一緒だからいい」とぶっきら棒な若者らしい言い方で答えて、すたすた階段を上がっていく。

聞けば、部活で練習試合に行くのだとか。態度に現わすのは苦手のようだけど、接してみれば優しく気のいいヤングなのだ。荷物を両手に抱えて前を行く2人の若者の姿に胸が熱くなった。若い衆、捨てたものじゃない。

本当に小さな勇気だったけれど「座らせれくれないか」という、私などには言えそうでいままで中々言えなかった「ひとこと」をひよんなことから思い切って発したことで、若者と後味のいい爽やかなコミュニケーションを生むことができた。礼を言って別れたが、うれしい一日だった。彼らも多分、少し良いことをしたという気持ちになってくれたのではないだろうか。私もこの小さな出来事を機に、若者に声をかける勇気が生まれてきた。

若者を接する前から「信用できぬ」「ジコチューで怖い」と総括して積極的に会話しようとしなない私たち高齢者。でも、優しい若者だって沢山いるはずだ。事なかれで腰を引いているばかりでなくて、時には若者と老人が進んで声を掛け合って心を通わせることも、今の世の中、少しは住み易く、あたたかい街づくりに繋がっていくのでないかと思ったことである。

声を出そう、声をかけよう、住みよい街にするために。反省を込めて私は今、趣味の会で、地域の集まりで、機会を見つけて、この輪を広げることに喜びを感じつつ、実践に励んでいる。

みんなが小さな勇気を持つ。それが大きな勇気に繋がる。そう信じたい。ささやかな体験が私をちょっぴり変えてくれた気がする。

(了)

昭和34年、大学卒業後、東京都の教員として働く。平成9年、定年退職。現代は博物館等でボランティア活動をしている。

ある挑戦

「いやー、よかったですよ。お年のようですが元気ですね。私も見習いたいもんです。私は65歳ですが、我々老人の励みになります。」

群読音楽劇「銀河鉄道の夜」という舞台を終えた時のことだ。知人を迎えるために出入口で待っていた私の所に、見知らぬ男性が近寄って来て、話しかけてきた。

「よくあのような長い台詞を覚えられましたね。私なんかとても・・・、どうやって覚えたのですかー。」と質問してきた。

「いや、それが私だってなかなか覚えられませんでしたよ。ひどい目にあいました。何回も何回も繰り返し覚えるしかないです。なにしろ覚えちゃ忘れ、覚えちゃ忘れするんですからね」

このようなやり取りをして、その人は帰って行った。古希を迎えた私は、何か一つ挑戦してみようと思っていた。老人老人・・・と老人を邪魔者扱いするような風潮を感じる昨今、老人だってやればできるんだ ということを知らせたかったのだ。

そんな時、たまたま群読音楽劇「銀河鉄道の夜」を一般公募するという新聞広告を見たのだった。

群読を少々体験したこともあり、宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」をどのように演出するのだろうかに興味を持った私は、受けて見ようと思った。しかし、古希を過ぎた年齢である。そんな年寄りをメンバーとして迎えてくれるだろうか、演劇なんて、小学校の学芸会以来、やったこともない、受かったとしても、最後までやり通せるのだろうか・・・と、いろいろな不安材料をかかえ、一抹の不安をいだきながらも、チャレンジしてみようと思決心した。

だが、家族には内緒の応募だ。もし落選したら恥ずかしいし、第一、相談したところで、たちどころに「いい齡して・・・そんなことやめなさい」と、一蹴されるに決まっている。それでだまって受けてみた。

案の定、オーディションは若い人ばかり。何人か中年もいたが、みな演劇に経験のある人たちばかりだった。

これでは受かりっこないと、あきらめて家に帰って来たのだが、数日後、合格の通知を受けた。全く予期していなかったことだったので、嬉しかったが少々あわててしまった。

練習が始まってからは大変だった。予想だにしていなかった踊りがあり、おまけに長い台詞を暗記するはめになったのだ。たった5日間の練習。私は電車の中でも暗記に励んだ。しかし、やはり齡には争えない。覚えたと思っても舞台上上がると忘れてつかえてしまう。いやになって逃げ出したくもなったが、メンバーに支えられ、若い人のエネルギーをもらいながら、チャレンジ、チャレンジ・・・と頑張った。おかげで3日間の公演を無事終えることができ、感慨無量だった。

舞台を終えてつくづく思うことだが、年を取っても、自分の好きなこと、やってみたいと思うことには、挑戦してみることだと思ふ。若い人たちと一緒にやることによって、そのエネルギーももらうことができる。見に来てくれた知人たちも、「若いね」とほめてくれた。声をかけてくれた人もそうだったが、何よりも嬉しいのは、お年寄りの励みになったこと、人のためになったことだ。それが自分自身の自信につながり、また挑戦してみようと、活性化していく。脳も働くようになる。

定年退職までは、家族のためと・・・と生活のために自分を犠牲にすることも多かったろう。会社のために苦しいこともあったろうが、これからは「自分」を大切に生き方をすることが、

なによりも大事なことなのだと、一つの挑戦をすることで気がついた。

約15年間、保育士として就職、35歳から准看護師、52歳から正看護師として病院勤務。

「ひきこもり高野山の僧となる」

手もかからず、反抗期もなく、塾にも行かずに進学校に入り、有名国立大学に入学し、官庁に就職も決まった長男が、所請「ひきこもり」状態になるとは予想だにできなかった。

私自身は長男が20才になるのを機に離婚をし、長女を大学に通わせて就職するのを心待ちにしていた時期であった。

就職直前に官庁への就職をキャンセルし、大学院受験に準備に入った時期であったが、一生は一度だからと気にもとめず送金だけはきちんとしていた。

ある時、家主から家賃催促の手紙がきて、家を訪ねると山のよなゴミが散乱していた。

夜は出かける様であるも、昼間は家にいる様な状態であり、時折猫の治療費の請求書もあったが、勉強しているのだと信じて疑わなかった。

大学院の準備金は送金したが、受験する気配すらなかった。服装もあれていた。

ある時、会いにいき、今後のことをきくと、「死にたい」という。

もう3年近い日々が流れていた。私は死ぬのは自由だけど少し早いのではないかと答え、家への帰り道でずっと泣いていた。

新聞やテレビで親が子を、子が親を引きこもりがきっかけになって殺すという凄惨な事件がいくつもおきていた。無差別殺人の犯人も何年かひきこもりをしていた等という週刊誌の記事をみる度、ただ泣くだけだった。

80才近い父を連れて子供にも会いにいった。子供はただ何をしたらいいかわからないのか、人生を無情に感じているのがわか

らなかった。ただ一緒に食事をしたり、紅葉をみたり、友達の所へつれていったり、所請、傾聴、見守りの7年間の様だったと思う。

私は自分の人生設計通り、正看の道をめざし、勉強中であり、子供は自分の意思でどうにかなるさとたかをくくる事にした。

生まれてくるのも人生、親と暮らすのも人生、自分で自分の道を選ぶのも人生と思っていた。

あの子のせいで、私は勉強のできる子の親として優越感もあじわい、一流高校の様子を知り、国立大学の様子もわかったじゃないか、私は幸せな親だったと思う事にした。

7年がたったある日、大学院に受かったと電話があった。ない金を工面し、大学院の入学資金を作ってやった。奨学資金に落ちた事を知り、すべての貯金を生活費にあててやった。大学院で又ちがう人間関係もでき、ひきこもり状態からとびたった様だ。

この7年間の間に自分の涙をすべて使った様な気がした。長い様な短い様な日々だった。

大学院の修工課程が終わり、大学の教師をみざすと思っていた頃、子供から僧侶になりたいと電話が入った。どう答えていいのかわからなかった。僧侶という世界がわからない、世襲制の強い世界で子供が生きていけるのかどうか私にはわからなかった。

でも自分で切り描いた世界なら行ってほしい、もう一人の私がいった。

私は年老いていた。自分一人で生きるだけで精一杯だった。反対する気力もなかった。「好きな道を進んで嫌なら帰っておいで」と私が言える精一杯の言葉だった。

1年間、遠い高野山で辛い修行をして、今年の春、僧侶となった。

長い長い春だった。

子供は今も遠い所で僧侶として生きているのだろう。世の中の無情やルールを知り生きているのだろう。涙も流しているのだろう。

子供を信じよう。自分の子供なのだから。どんな風に生き様と子供を信じよう。

子供が小さかった頃、どんなに親を幸せにしてくれたか思いだそう。この世に授かった幸せを思いだそう。

長い冬の後には春が来る事を信じよう。自分も本当に辛かったことを仲間に告げよう。仲間にも春がくることを告げよう。

7年たってようやく自分から解放され、ボランティアで「ひきこもり」の子供を見守れる余裕もでてきた。

力をぬいて、子供を見守っていこう！疲れたら休んで見守っていこうと！と誰にもいえる素直な親になれてありがとう。当然君のお陰だよ。本当に感謝してる。

昭和35年、キリンビール入社、平成13年、同社退社。平成20年放送大学5年在学

『働くことは生きること』

平成13年7月21日、会社を定年退職した。前日まで身を置いていた工場建設プロジェクトチームのメンバーに見送られて車で工場の門を出たとたん、不覚にも涙があふれ出た。

時限のあるプロジェクトチームはかつてNHKで放送されていた「プロジェクトX」に見られるように、かなりきつい工程で運営されるのが普通である。深夜まで及ぶ過酷な労働に、時には呪いの言葉を吐きながら時には定年退職を指折り数えながら耐えてきた。稼動も軌道に乗り、過酷な労働から解放され、待っていた定年は多くのチームメイトからうらやましがられ、自身もそんな気分であったから、この涙は自分でも以外であった。

単身赴任先から自宅に戻り、半年ほどはゴルフやら旅行で過ごした。他人から見たら悠々自適であろうが、父から刷り込まれていた労働に対する倫理感にさいなまれた。曰く「1日働かずんば、1日食すべからず」

そんな鬱な日々を送っていた私を心配して妻が町の臨時職員の募集公示を持って来た。その職は遺跡の発掘作業であった。面接会場には20人ほどの募集に6倍の120人もの人が押しかけていて驚かされた。条件は雨天休業、1日7千円余、半日労働も可、2月から4月休業、年収にして100万弱というもので、特に好条件とは思えなかった。男性はほとんどが定年退職者で、女性は40代から60代とやや幅があった。

幸か不幸か私は採用されることとなった。今まで経験したことの無い、スコップでの穴掘りや、一輪車での土運びで手には豆が出来、体中がサロンパスの広告塔のようになったが、社会と繋が

ってられるという連帯感と労働して糧を得ているという満足感があった。

舞台俳優は倒れるまで舞台に立つのが理想だと聞いた。そしてこの10月に緒形拳氏がそれを実践して見せてくれた。ガンと闘いながら映画を撮り続けたという。俳優にとっては本当に働くことが生きることであるのが分かった。

今、日本の高齢化率進捗は急ピッチである。1970年7%であった65歳以上の人口は1994年に14%を超え、2005年には20.1%となった。老人医療費も10兆円規模となった。これは国家税収40兆の25%にもなり、この数字は増加の一途である。平成19年厚生労働白書の人口ピラミッドの変化表を見ると、高齢化率は2030年には32%、2055年には何と41%にもなる。

2030年まで私が生きていたとしたら、89歳である。父は74歳、母は96歳で亡くなっているから、もしかしたら私は生きていくかもしれない。

きれい事では済まされない数字である。この大勢の高齢者を抱えて、日本は繁栄していけるだろうか。死んで行くのであるから、あとの事はどうでもよいと言えるだろうか。

旅行に行ったとき同行した、人が言っていた。「我々は一生懸命働きこの国を豊かにしてきた、年金を貰う権利があり、それで大いに遊ぶのだ」と。

私は反論した「年金は積み立て給付では無く、賦課給付で現役者からの税で賄われている部分もあり、それは権利では無い」と。私の論は肯定されなかった。

私は今も6倍の競争を勝ち抜いたアルバイト応募者達と遺跡を掘っている。決められた時間に起き、労働をすることは、自身の健康にも良いし、父の労働倫理も裏切らない。地域にも役立ち、

社会とも繋がりが持てる。

退職後帰農した友もいる。働いて、小遣い銭を稼ぎ、少しは税も納める。彼とは共感出来ている。「働くことは生きること」と。